

堂々川ホテル2代会長高橋孝一氏を偲んで

～数ある中のもう一つの顔～

土肥 徳之

「堂々川」は「福山志料一下御領村・石の項」に烏岩の名前が出てきます。「国分寺西トウトウ川中流ニアリ今埋レシテミエスコノ川中ニ直立柱ノ如ク高二丈アマリ人ノボルコト不能故鳥巢ヲツクル・・・」茶山師と堂々川のつながりが分かります。

私が小学生の頃、近所の悪ガキ先輩に連れられて山に入ると、そこには春、タリンコ、ワラビ、ツクシが、秋にはアケビ、アサダル、ハゼ（やまなすび）まつびいびい（ヤドリギ）がたらふく食べられました。砂糖が貴重品の時代、お八つ代わりは自然一杯の山の幸でした。あれから半世紀過ぎた平成・令和の世、地元をはじめ近隣の小学校が遠足にやって来て彼岸花の球根を植えてくれています。その成果が、不法投棄多発の堂々川沿いや川原を観光地に変えていきました。球根を植えたある児童がお礼の手紙をくれた内容を披露させていただきます。「おばあちゃんが堂々川は汚いところだと言っていたが来てみたら綺麗でお弁当も美味しくたべられた。ありがとう」と書いてあり、設立発起人3人は目が潤んでいました。2012年発起人で副会長の一人が高橋さんを口説き落とし、会長になっていただきました。2代目会長は「ええです、ええです。やりゃんほう」と後押しをして貰った記憶が残っています。この年から初代会長の基礎を踏まえて会は飛躍的に発展したのです。

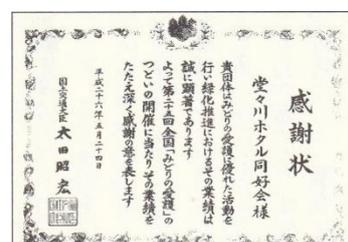
2013年6月ひろしま環境賞、同11月中国放送エコロジー大賞を受賞、広島まで事務局は会長のお伴をしました。中国放送さんは副賞として気象予報士を御野小学校へ派遣して、講堂で地域の人と小学生に気象の基礎の講演をしてくださいました。

2014年国土交通大臣感謝状をいただけることになり、新副会長二人と事務局長を連れて徳島迄ドライブしました。植樹祭に参加したのですが、高橋会長のすぐ隣で当時の皇太子「徳仁親王」がスコップを持ち、木を植えられたそうです。会長らしさを発揮し、「ナルちゃんの隣で植樹した」と大喜び、大臣表彰を度々受賞されているはずだが、この喜びは尋常ではありませんでした。

写真②2014 感謝状

2015年環境大臣表彰受賞が決まり、東京半蔵門近くのホテルでの受賞式には奥様同伴で参加され、随員の事務局長は夜、息子の家に泊ったので喜び様はわかりませんでした。しかし、「よくもマァー毎年毎年大きな表彰がいただけたものだ」と、自分がトップなのに感心されていました。

2016年5月第2回福山ブランドの登録活動部門に認定され、福山市は活動部門のPRの一つとしてポスターを作成、福山駅新幹線エスカレーター脇に掲示されたのは今でも語り草になっています。この時、何時も良いことは続かないといいま



2014 感謝状

すが、事務局長が席を離れていた時に、登録団体の撮影があり位置が決まったらしく、会長は本来あるべき中央ではなく端の方に立たれていました。この時は「大変申し訳なかった」と反省しています。

そして11月、民間の主催としては全国初めての「全国砂留シンポジウム」を神辺文化会館で福山市100周年記念資金や会長ら資金の一部を出していただきて発刊した冊子の販売利益を利用して開催しました。冒頭のあいさつは高橋会長から。その要約「『天災は忘れた頃にやって来る』と申しますが近頃は忘れないうちにやって来るようです。日本列島は災害列島と呼ばれ、天災に見舞われることが非常に多く、近くは東日本の地震と津波、そしてもっと近くは広島土砂災害、この地神辺でも都度々災害が起こっています。堂々川の土石流は旧国分寺の境内一帯を押し流した大変な大災害で63名の犠牲者を出しています。その対策として福山藩はたくさんの砂留を造りました。それ以来、我々神辺に住んでいる人間は災害を忘れて生活しています。堂々川の砂留は日本一美しい姿をしている現役の砂留です。この史跡は登録有形文化財です。これらのことが本日のシンポジウムを開催するきっかけになっています。本日は砂留の専門家の方々をお招きして、砂留に関するいろいろなご意見をお伺いし、自然災害や砂留について、改めて学びたいと思います」

以後のスケジュールも地元選出衆議院議員、県知事、県議、市長、地元市議の各先生方からお祝辞をいただき、福山市立大学の教授にコーディネーターをお願いし、パネルディスカッションを実施。福井、長野、国土交通省の方、他の関係各位のご意見をいただき進行して、2部に入り市立西・中条・御野小学校の砂留劇や歌、ダンスなどの披露があり、続いて基調講演は福山大学名誉教授が芦田川についてのお話をされました。

今回のシンポジウムの総括は2016年10月16日に中国新聞「天風録」が掲載してくれました。「最も人気のない文化財と地元の声もあるが、砂留を知って災害と向き合い続ける縁の下の力持ちの無言の声に耳を傾けたい」は我々の活動の原動力になり、大きな目標の砂留文化「堂々川ホテルと花と砂留と」を守る活動として次代へ繋いでいきたいと思っています。このイベントの打ち上げは高橋会長の古いお友達の家で行われ、この宵も、会長十八番の草笛が山の中で鳴り響きました。

2017年、彼岸花の開花数18万本、花色17色を置き土産に高橋会長は辞意を表明されました。以降亡くなられる2020年7月迄顧問をお願いし、問題や計画について相談しましたが、相変わらず「ええです、ええです」との答えが返ってきました。

2020年会長の看板がかかっている5番砂留の桜周辺は彼岸花の赤、白が咲き乱れ、スケッチする人やカメラマンが引ききらず押しかける観光スポットで、「堂々川彼岸花が広島県トップレベルの里になった」と言われるようになりました。又、同好会の「歩いて健康、見て観光、食べて薬効、素敵な微香、五光揃って最高だ」の標語どおり、堂々川を散歩する人も多くなりました。

会長在籍の6年間、会の活動を見ていただくと共に、ご指導などありがとうございました。会員一同ご冥福をお祈りしております。